

2022. 3. 12 (日) 使徒7:36~38

7:36 この人が人々を導き出し、エジプトの地で、紅海で、また四十年の間荒野で、不思議としるしを行いました。

7:37 このモーセが、イスラエルの子らにこう言ったのです。『神は、あなたがたの同胞の中から、私のような一人の預言者をあなたがたのために起こされる。』

7:38 また、モーセは、シナイ山で彼に語った御使いや私たちの先祖たちとともに、荒野の集会にいて、私たちに与えるための生きたみことばを授かりました。

<説教>

本日も、ステパノがモーセについて語ったことから私たちが教えられたいと思います。

もう何回も聞かされて「耳たこ」だと思いますが、ステパノがこの最高法院の場でモーセのことを語ったのは、ステパノが「モーセを冒瀆することばを語っている」とのうわさが流れ(6:11)、ステパノが「律法に逆らうことばを語るのをやめない」(6:13)、『『あのナザレ人イエスは、…モーセが私たちに伝えた慣習を変える』と言っている」(6:14)という訴えがなされたからでした。それでステパノは、自分はそんなことは言っていない、考えてもいない、むしろ自分はモーセを、聖書が言っているように正しく理解しているのだと証言するのです。モーセは、神がイスラエルの民の指導者、また民をエジプトの奴隷から解放する者として、芝の茂みの中で彼に現れた御使いの手によってエジプトにお遣わしになった特別な人だったとステパノは言うのです。しかし、そのモーセはまず「だれがおまえを、指導者やさばき人として任命したのか」と言われて同胞イスラエルの民から拒まれた人でした(7:35)。もちろん、ステパノはここに、ペテロが先に何度も言っていたように、「人々から拒まれて十字架で殺されたイエスと、しかしイエスを約束のキリストとして立てており、よみがえらせた神」との共通点を見ているはずで

さて、モーセが同胞から拒まれたのは40年も前のことでしたが40年経っても人間の心はそう簡単に変わるものではないのも事実です。「アブラハム、イサク、ヤコブの神」がモーセに現れ、任命しお遣わしになったとモーセが言ったところで、一度は拒んだモーセの言うことをイスラエルの民は聞いて従うでしょうか。ですから神はまずイスラエルの民がモーセの言うことを信じるようにモーセに〈不思議としるし〉を行う力をお与えになったことが出エジプト記の4章に書かれています。そのようにモーセは「栄光の神」、「アブラハム、イサク、ヤコブの神」によって特別に召された、イスラエルの民をエジプトから解放する者、指導者だったとステパノは正しく証言しました。

そんなモーセの「特別さ」を示すのに、ステパノは「この人が」とここで3回も繰り返して言って言っているように見えます。〈このモーセが〉(37)も、〈また、モーセは〉(38)も直訳は「この人が(は)」です。そのようにステパノはモーセと神を冒瀆したり神の律法に逆らっているのでは断じてなく、神がモーセに特別な任務と権威お与えになったことを信じ、それ故に神を崇め、モーセを重んじているのです。申命記の最後(34:10-12)に次のように書かれているとおりにです。〈モーセのような預言者は、もう再びイスラエルには起こらなかった。彼は、主が顔と顔を合わせて選び出したのであった。それは、主が彼をエジプトの地に遣わして、ファラオとそのすべての家臣たち、およびその全土に対し

て、あらゆるしるしと不思議を行わせるためであり、また、モーセが全イスラエルの目の前で、あらゆる力強い権威と、あらゆる恐るべき威力をふるうためであった。)

そんな〈この人〉モーセであればこそ、〈人々を導き出し、エジプトの地で、紅海で、また四十年の間荒野で、不思議としるしを行〉うことができました(7:36)。イスラエルの民とエジプトにモーセを特別にお遣わしになった神がモーセを用いてそれぞれの場で神のみこころを行われたのです。これもまたペテロがイエスについて、「神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと不思議としるしを行い、それによって、あなたがたにこの方を証しされました。」と言っていたことと共通しています。

次いでステパノは言いました。〈このモーセが、イスラエルの子らにこう言ったのです。『神は、あなたがたの同胞の中から、私のような一人の預言者をあなたがたのために起こされる。』〉(37)と。これは申命記 18 章 15 節からの引用です。〈四十年の間〉の最後、モアブの地(アラバの荒野)でモーセがイスラエルの民に語ったことです。神の民イスラエルが約束の地カナンに入ってしまった後、神がモーセを通してお与えになった律法を守り行うように、モーセ亡き後も神は預言者を起こし、その預言者が神のみことばを受けて民に語るということを神はお定めになりました。〈預言者〉が単数形なのは(故に「一人の」と訳されている)、預言者が神から受けて語るみことばは唯一の真の神による首尾一貫したみことばであり教えであるという意味もあるでしょう。しかしそれは「一人の、来たるべき約束のメシヤ(キリスト)のことだ」という理解もあって、ペテロはまさにこのモーセのことばを、「あらかじめキリストとして定められていた」イエスについての預言だったと言いました(使徒 3:22)。イエスご自身が、「もしも、あなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことなのですから。」(ヨハネ 5:46)とも言っておられました。ステパノももちろんこのモーセのことばを語ることによって、イエスこそはあのモーセが神からみことばを受けて指し示した〈一人の預言者〉、約束のキリストだと証ししていました。

ステパノは更に言いました。〈また、モーセは、シナイ山で彼に語った御使いや私たちの先祖たちとともに、荒野の集會にいて、私たちに与えるための生きたみことばを授かりました。〉(38) 〈荒野の集會〉であるイスラエルの民に与えるための生きたみことばを神から授かり(預かり)、民に与えるのが預言者としてのモーセの職務でした。神はモーセを〈顔と顔を合わせて選び出し〉(申命記 34:10)、〈顔と顔を合わせてモーセと語られました〉(出エジプト 33:11)。その点でモーセの特別さは際だっていました。そのようにしてモーセは〈荒野の集會〉にいて、神と民との仲介者としても神によって立てられ、民に与えるための生きたみことばを神から受け、民に語り、教え、与えていました。その点でもモーセは彼のような一人の預言者イエス・キリストと共通していました。〈神は昔、預言者たちによって、多くの部分に分け、多くの方法で先祖たちに語られました。この終わりの時には、御子にあって私たちに語られました。〉(ヘブル 1:1-2a)と書かれています。そのように、今や御子イエス・キリストが私たち、キリストの教会においても、神と私たちの間の唯一の仲介者として神によって立てられ、お語りになり、働いておられるのです。イエスこそは「神とともにおられた(「向かい合っていた」の意)お方であり、神の〈ことば〉そのもののお方です(ヨハネ 1:1)。なお、ここで〈荒野の集會〉の「集會」と訳されている言葉は「エクレーシア」(「呼び出された者、召し集められた者」の意)

であり、普通は「教会」と訳されています。ですから、モーセは、その時代に神によって召し出され集められた「荒野の教会」で神の〈生きたみことば〉を神から授かって、民に語り与えていたのです。

そのように、ステパノは今やモーセを「イエス・キリストのような」一人の預言者、仲介者として認め、重んじていることを証ししたと言えるでしょう。私たちも「荒野」のような状況の中に置かれている「教会」だということもできます。ですから、やはり〈生きたみことば〉イエス・キリストだけを信じ、依り頼み、〈生きたみことば〉に聞き従って行かなければなりません。